

この事業の整備にあてるなど、オランダの修史事業に対する並々でない熱意に対しては敬服に耐えない。もちろんこの史料集には上述したような幾多の欠陥もあるが、この種の事業がまだ歴史も浅くその発展は今後にまつものである現在、このような史料集の刊行に先鞭をつけたことは大きな意義をもつものであり、本書はその意味で記念さるべき刊行物といつてよからう。

戦後二十年近くなつて、日本では恥ずかしながら太平洋戦争において日本軍が占領し、統治した諸地域に関する史料の蒐集と刊行というような企劃は公私ともに全くない有様である。このような情況下では、それだけでなく終戦と同時に壊滅状況にある日本の南方軍政関係の公私の史料は日を追つて益々消滅して行くことは火をみるよりも明らかである。それ故南方地域はもちろん、中国も含めて太平洋戦争中日本が占領、駐軍した諸地域の治政関係の史料の蒐集と整理保存は今日緊急な事業ではなからうか。

(Dr. I. J. Burgmans en Dr. H. J. De Graaf; *Nederlandsch-Indië onder Japanese bezitting*. Franker, 1960.)

サー・ハロルド・ベイレイ著

コータン語テキスト 五卷

辻 直 四 郎

筆者は本誌第三十五卷(一九五二)八五―八七頁に、ベイレイ教

授の *Khotanese Buddhist Texts* (London 1951; cf. K. T. iii, p. 140: errata) の内容を紹介し、中央アジアの仏教およびインド・イラン語学の研究に対するその重要性を強調した。すでにこれより先、一九四五年に第一巻が出版された *Khotanese Texts* (以下 K. T. と略す) は、昨年第五巻の上梓を見て、ここに一応原典出版を完了した。この大出版の価値は、著者自ら最終巻の序文に述べるところによつて明らかである。「コータン語テキスト第一―五巻およびコータン語仏典の中に出版されたテキストの興味と価値とは三平面に存する。第一に、ここに提示されたのは、イラン語研究の根本資料の一重要部分をなす一イラン語の記録である。この言語は古い面影を保ち名詞動詞はなお高度の語尾変化を行い、たとい動詞の活用にあつては現在組織と *ī-stā* に終る分詞に基づく過去形に限定されたとはいえ、語頭子音および子音群の音声状態ならびに母音においては古代イラン語の段階に近く、語彙の豊富な点においては他の同時代のイラン諸資料にゆづらない。(大部分) 失われた古代イラン語彙の回復のために、コータン語は、ソグド語・ホラスミア語・パルティア語および初期ペルシャ語と共に、肝要な貢献をなしている。古代イラン語彙が再建された暁、それはアヴェスタならびにリグ・ヴェーダに関するインド・イラン語研究に欠くべからざる利器となる。第二に、仏教の研究者は、インド外のインド文化を見渡すにあたり、歴大複雑な現存仏教文献の中に、開拓すべき新領野をここにもつ。古い仏典がここに、コータン語の散文ならびに韻文で再述されている。研究者は例えば、*Manjūśrī-nāirātmyāvatara-*

sūtra [K. B. T. no. 29, cf. ib. p. viii] および敬虔な讃歌に於けるように、新奇の原典をも見出すことがある。第三に、中国への路、それだけに一層親密な中華の文化史のため、コロフォンおよび公文書は多量の資料を提供する。今われわれはこの地域の多数の居住者の名前を知っている。コータン語テキスト第四卷七一八頁に列挙された王名に、*Viśva Vikram* [K. T. v, p. 273, Harding 073 ii 1, 2; 2, 2] なるコータン国王名を更に追加し得る。この地域の文化を扱う際、歴史の画布の空隙を充填するものが今を望まじし。」(K. T. v, p. vii)

コータン語研究の第一人者の三十年にわたる偉大な業績を前にして、斯学の發達を顧みつつ、次に一括してその内容を紹介し、イラン語学に関心をもち、殊にコータン語に志す人の参考に供する。

第一卷 (1945; x, 257 pp.; cf. K. T. ii, p. 131-4: corr. and add.) は、二種の医学書と三種の仏典を含む。一、*Ravi Gupta* 作 *Siddhasāra* (p. 1-105; cf. K. T. v, p. 315-324) は、サンスクリットから翻譯された医学書で、コータン語に相應する藏文を対面の頁に納め、別に梵語原文が添えられてゐる (p. 106-134)。なほ序説の英訳は、*Studies in honour of S. H. Tagizadeh*, p. 31-38 に載じてゐる。二、*Jivakapustaka* (p. 135-195)。表題は仮称に過ぎないが、写本はコータン・サンスクリット画語彙次対照の医学書で、ここには両文を分離し、各々対面の頁に印刷されている。なほ *Sten Konow* は独立に、コータン語の部分のみに、英訳・語彙を添えて出版した。三、*Jātakastava* (p. 197-219)。原典は知られて

いないが、原著者の懇請により、ⁱⁱⁱ *Viśa' Sūtra* 王の名譽のため、*Ved-yasāra* がコータン語に翻譯したもの (十世紀後期)。一六九詩節とコロフォンからなり、約五十の本生話を簡潔に讀美している。これには *M. J. Dresden* 博士の詳細な研究がある。四、*Bhadracar-yādesāna* (p. 221-230)。コータン語普賢行願讀で、総括的研究として *J. P. Asmussen* 博士のものを推す。五、*Suvarṇabhasa-sūtra* (p. 231-257)。金光明經の断片で、*P. Pelliot* (Un fragment, MSL xviii, 1916, p. 89-125)・*E. Leumann* (Nebenstücke, 1920, p. 53-91)・*Sten Konow* (*Zwölf Blätter*, SP-RAW 1935, p. 428-486) の發表によつて知られてゐたが、これを補つ新資料がここに提供された。六、*K. T. v, p. 106-119* を參照。

註一 井ノ口泰淳「チカラ語とウチン語の仏典、西域文化研究第四 (一九六二) 三三五—三六頁參照。なほ Ms. E fol. 354 b ff. を大乘造像功德緣に比定したのは同氏の功績である。

註二 *Sten Konow: A medical text in Khotanese. Avhandlingar utgitt av det Norske Videnskaps-Akademi i Oslo*, ii, Hist.-Filos. Klasse, 1940, no. 4. Oslo 1941. Cf. K. T. i, p. x.

註三 Cf. K. T. ii, no. 15: p. 57; no. 68: p. 123; iv, p. 7, n. 5, p. 8; Dresden: *The Jātakastava*, p. 485 sub *viśa'.*

註四 *Mark J. Dresden: The Jātakastava or "Praise of the Buddha's Former Births." Indo-Scythian (Khotanese) text, English translation, grammatical notes, and*

glossaries. Transactions of the Amer. Philos. Soc., New Series—Vol. 45, Part 5, 1955. Philadelphia 1955. 後期トータン語學習のための最良書。Cf. H. W. Bailey JRAS 1958, p. 104-105.

註五 Jes Peter Asmussen: The Khotanese Bhadracaryāśānū. Text, translation, and glossary, together with the Buddhist Sanskrit original. Hist. Filos. Medd. Dan. Vid. Selsk. 39, no. 2. København 1961.

第二卷 (1954; x, 134 pp.; cf. K. T. iii, p. 140: errata) は比較的長い文書の全部と若干の短いものを合せて十二種を収めている。八世紀から十世紀にわたる中亜における中国人・トルコ人、その他の民族に関連し、コータン諸王の名を挙げ、称号・固有名詞に富み、中国語・チベット語・トルコ語よりの借用語を含み、歴史資料としての価値は大きい。既に発表された研究については、Preface p. v-vi 参照。宗教的内容をもつものは、no. 1-10 no. 57-71 前著 (lines 77-86) は法華經の一部の摘録を (cf. K. T. iii, no. 22) 後者は 'Kāṇaśka-legend' を含むもの (cf. H. W. Bailey JRAS 1942, p. 14-28: lines 154-194 transl. with notes)。

第三卷 (1956; viii, 140 pp.) は、七十五テキスト (nos. 1, 3, 6, 26, 27, 28, 52 など) nos. 33, 34 の若干行を除き、始めて世に問われたもの)を含み、Pelliot 蒐集に属するパリ所在のコータン語テキストは、これをもつて出版を完了した。内容は甚だ多様で、'Bud-

hist didactic prose and verse, love poems, medical texts, official documents, bilingual texts in Chinese and Khotanese, and in Sanskrit and Khotanese, also Turkish" (Preface p. v) を含み、仏教梵語の陀羅尼ならびに若干の詩節も存在する。また巻頭の Avalokiteśvara-dharaṇī (p. 1-13) は 'Suvārābhāsa 等を含む' コータン語の最も古い階層を代表する (cf. K. T. v, p. vii)。

第四卷 (Saka Texts from Khotan in the Hedin Collection, 1961; viii, 192 pp.)。ここに収められた七十五テキストは、故 Sven Hedin 教授 (E. Norin 博士など) N. Ambolt 博士がコータン地方からもたらしたもので、一部分は紙に (nos. 1-30)、他は木に (nos. 31-75) 書かれ、宗教・文学的断片、商用書簡、軍隊命令を含む (八世紀乃至十世紀)。本巻は前三巻と異り、本文のほかに、その英訳と詳細な注釈ならびに単語の索引が添えられ、さらにこれらのテキストの背景を解明するため、巻頭 (p. 1-18) に 'Gaustana: The Kingdom of the Sakas in Khotan と題する序文があとつ、コータン国 (Hvatāna) の歴史・王室・文化・宗教・文学・民族・言語等を簡明に説明している。サカ(塞)族はもちろん単一ではなく、言語の上から見ても、コータン・サカ語とこれより古風なトゥムシユク (Tumshuq)・サカ語とが区別され、前後約四百年にわたる西北インドに足跡を残したいわゆるインド・スキティア人もまた同族であり、同系の言語を用いたに相違ない。著者はその序文

を結んで、「望むらくは今後、これらのテキストの知識なくして、クシャーナ族を敢えて扱う者のなからんことを。中亜の領域のためのみにも、これらの文書は、中国の史家が記録に値いせずと考へたる地方的委細を提供す。We can see the 'Barbarians' from within」云々云々云々。

第五卷 (1963; xiii, 395 pp.) は、長短合せて実に七十九テキスト (ほかに Appendix, Addenda) を収め、ここに始めて出版された多数のテキストのほか、著者の手にし得た限り、既刊のものをも含めて、Hoernle 蒐集の全部を載せ、大谷探險隊のもたらした断片をも収録している (nos. 690-692)

内容は極めて豊富であるが、ここにはまず既刊の重要仏典と関係あるものを挙ぐる。no. 208: *Suvarṇabhāṣa* (上記 K. T. 1 参照)。nos. 237-8: *Vimalakīrtinīrdeśa* (蔵文 = p. 377-8 参照。Cf. E. Leumann: *Nebenstücke*, p. 42-49)。no. 529: *Aparimitāyuh-sūtra* 無量寿宗義經 (a var. in K. B. T. no. 26; cf. Sten Konow in Hoernle: *Miss. Remains*, p. 289-329, vocab. p. 330-356)。nos. 701-723: *Saṃghāṭa-sūtra* 僧伽陀經 (蔵文 = 379-380 参照。Cf. E. Leumann op. cit. p. 1-41; Sten Konow: *Saka Studies*, p. 63-111)。陀羅尼文獻として、no. 150: *Amṛtaprabhādharāṇi* が加えられ、梵文中亜文字に転写した nos. 728-9: *Śītapatradharāṇi* 大白傘蓋總持陀羅尼經がある。同様の転写本、nos. 525-6: *Uttaratantra* (i. e. *Ratnagotravibhāga*) 究竟宝

性論, no. 727: *Kausika-prajñāparamitā* 帝釈般若波羅蜜多心經にも見られる。

本紹介文の始めに引用した第五巻の序文は、次いで「コータン語 (*khātanaa*, *hvaṇnaa*) の新古四階層を適切に解説し、文字、古コータン語テキスト中に見られる仏教梵語からの借用語形、ローマ字転写の困難、複写 (*facsimile*) の所在等につき一言し、未刊の資料はなお確かに存在するが、テキスト出版はこれをもつて一応完了した旨を告げ、今後の予定としては第四巻に附したと同様な注釈を提供すること、それよりも先ず三十年來蓄積した研究成果を盛つた辞書を完成することを挙げている。サー・ハロルド・ペイレイ教授が各種の學術雜誌 (*BSO(A)*s, *TPS*, etc. etc.) 或いは記念論文集に發表された長短多数の論文を読むごとに、教授が常にインド語との連繫を旨とし、古代ならびに中期の全イラン語のみならず、近代のオセッ語をも駆使して、アヴェスタ或いはリグ・ヴェーダの語彙を究明する手法と該博無比の学殖とに驚嘆の目を見張る。教授が積年の蘊蓄を傾注して前記の辞典・注解を世に送り、コータン語の研究に確固たる基礎を与えられんことを切望する。なお文典に關しては、故 Sten Konow 教授の著作 (*Saka Studies*, Oslo 1932; *Khotan Grammar*, Leipzig 1941; *Primer of Khotan Saka*, Oslo 1949) の恩沢に浴し、後期コータン語のためには前述の *hvaṇ*、Dresden 博士の好者 (*The Jātakastava*, Philadelphia 1955) を利用し得るとはいへ、最近までの成果に立脚し、し

かも入門書として適当なものの例えは「カカラ語における W. Krause und W. Thomas: Tocharisches Elementarbuch, Heidelberg 1960」のような規模で書かれた参考書が現われるならば、語学者のみならず仏教学者によるコータン語研究は、さらに活潑となる、急速に進歩するものと信じる。これをどうインレイ教授に求めるので、既に睡を得て復讐を望むものか。

註一 サカ語全般に關つては、H. W. Bailey: *Languages of the Saka. Hb. der Orientalistik. I. Abt. 4. Bd. Iranistik, I. Abschnitt: Linguistik* (1958), p. 131-154 が、最好の概説書である。

註二 特々 H. W. Bailey: *Codices Khotanenses. Copenhagen 1938; Saka Documents i and ii (= Corpus inscriptionum iranicozum ii)*. Cf. K. T. ii, p. vi; iv, p. vii; v, p. x, n. 1.

(H. W. Bailey: *Indo-Scythian Studies being Khotanese Texts, I-V, Cambridge, 1945-1963*)

アーレフ・イクリギニル著

ナスレッディン＝ホジャの機智の

ブリズムを通して来る光《物語の教訓》

その生涯、逸話に關する思想的・哲學的一研究

護 雅 夫

東洋文庫には、いわゆる「ナスレッディン＝ホジャ物語」の版本が十種類所蔵されている。そのうち主要な七種類を、出版年の順に列挙する。この如くである。

(1) Sami Ergun: *Manzum Nasreddin Hoca Fıkra ve Hikâveleri. Bir renkli Tablo, 38 Resim ve 150 Fıkra* (Ankara, 1950). (サミシ＝エルグン「韻文による、ナスレッディン＝ホジャの逸話・物語集——原色図版一葉、插图三入葉、一五〇語——」)。

(2) Ercüment Ekrem Talu: *Büyük Nasreddin Hoca* (İstanbul, 1954). (エルクメンタル＝エクレム・タル「偉大なナスレッディン＝ホジャ」)。

(3) Ragıp Şevki Yegim: *Dünyayı güldüren Adam. Bü-tün Fıkralarile Nasrettin Hoca'nın Hayatının Romantiki* (Ankara, 1956). (ラグプ＝シェウキ＝イギム「世界を笑わせる人物。ナスレッディン＝ホジャの全逸話と示したその伝記小説」)。

(4) Eflâkım Cem Güney: *Nasrettin Hoca Fıkraları* (İstanbul, 1957). (エフラークタン＝ジヤム＝ギネイ「ナスレッディン＝ホジャ逸話集」)。

(5) Mehmet Ali Aksoy: *Nasreddin Hoca ve Hikâveleri* (İstanbul, 1957). (メフメト＝アリ＝アクソイ「ナスレッディン＝ホジャの物語集」)。

(6) A. Refik Gür: *Nasreddin Hoca'nın Nükte Menşu-*